

連携室だより

# 鹿児島医セン

鹿児島医療センター(心臓病・脳卒中・がん専門施設)

2024.2 vol.214

## 令和5年度 緩和ケア研修会

令和6年1月6日(土)に鹿児島医療センター附属看護学校にて、鹿児島医療センター緩和ケア研修会を開催いたしました。受講生は、外部からの研修生を含め、医師13名、多職種(看護師、薬剤師)11名が参加いたしました。御協力頂いた全ての皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。研修会は今後もさらに内容を充実させ開催して参りますので、皆様の御参加、御協力を宜しくお願いいたします。

令和6年1月6日(土)に、鹿児島医療センター附属看護学校で開催された緩和ケア研修会に参加しました。他職種の方々と共に、がん患者さんに対してどのように向き合うべきか学ぶことが出来た研修会でした。講義の内容に関しては、座学の各論から全人的苦痛や地域連携のグループセッションまで幅広い内容でした。個人的にグループセッションは、他職種の意見を聞けるのに加えて、医師として自分の意見を発言するだけでなく意見をまとめるリーダーシップ的要素が必要と認識することができ、とても有意義であったと思います。普段の研修中で少し学んではいるものの頭の整理ができていないまま、実際の診療に臨んでいましたが、今回の講習会で整理され、理解を深めることが出来ました。この講習会を運営・企画してくださったスタッフの方々に感謝し、実臨床の場でも今回学んだことを活用できるよう精進してまいります。

(文責：臨床研修医 坂田 雅道)

令和6年1月6日(土)に開催された緩和ケア研修会に参加させていただきました。多職種の方が参加した今回の研修会では「がん」という疾患について多くの視点から知識を深めることが出来ました。疼痛の原因とそれらに対するアプローチ方法を検討し、薬剤調整だけでなく環境調整やケアでの介入など各々の職種ならではの視点から意見を出し合いました。コミュニケーション力が試される病名告知のロールプレイでは、患者さん・医師・観察者の役を経験し、些細な言動や対応が患者さんの理解や感情に強い影響を与えることを実感しました。特に最後のセッションでの「在宅緩和ケアを希望する患者さんに対するサポート」についての議論では、医療スタッフだけでなく行政機関や在宅医療機関、ご家族との連携がなくては患者さんとそのご家族が本当に納得のいくサポートは実現できないことが分かりました。私たち医療者にとっては「がん患者のAさん」であっても、Aさんにとっては人生における一つの出来事としてがんを経験しているということ、患者さん一人一人にご家族や生活など様々な背景があることを忘れてはならないと改めて感じました。

今回の研修会で得たものを臨床の現場で生かし、よりよい医療を提供できるよう努力していきます。研修会を開催するにあたり、企画・運営をしてくださったスタッフの皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

(文責：臨床研修医 中尾 愛子)



# がん市民公開講座を終えて

去る12月16日（土）鹿児島県医師会館において、第10回がん市民公開講座を開催しました。今回で10回目を迎えた市民公開講座でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて令和2年以降直近の3回はWeb開催となっており、久しぶりの現地開催となりました。感染対策として4階大ホールを200名ほど収容できるようにセッティングしましたが、パラパラと降る小雨の中、約100名の参加者に会場していただきました。今回のテーマは「がんを生きる～もっと知りたい“がんサバイバー”のこと～」とさせていただきます。がん患者数が年々増加し、医療の進歩によって治療によって治るがん患者も増える中で、“がんサバイバー”という概念が広く社会に浸透しているとはいえません。がん患者の抱える悩みや様々な問題だけでなく、患者を取り巻く家族や医療者を含めた社会の在り方をも考える機会になればと思って企画しました。

田中康博院長先生の開会挨拶に続いて、統括診療部長の松崎勉先生から鹿児島医療センターのがん診療の特徴について発表していただきました。がん治療を行っている各診療科それぞれの紹介からはじまり、緩和ケア、がん相談支援センター、患者サロンまでを含めた包括的な内容になっていたと思います。次に皮膚腫瘍科・皮膚科部長の松下茂人先生から“がんサバイバー”とは何か、その定義や今回の市民講座の趣旨について概説していただきました。がんサバイバーとは、がん治療を終えた人だけでなく、がんと診断されたばかりの人や、治療中や経過観察中の人なども含む、すべての「がん体験者」のことを指しています。がん体験者本人だけではなく、その家族や友人、介護者も含めてがんサバイバーとするという広い概念で定義されることもあります。がん患者は、「副作用などの身体的問題」、「再発への恐れといった精神的問題」、「周囲との接し方などの社会的問題」、「治療費などの経済的問題」といった様々な問題に直面し、がんと診断されたときから生涯にわたって向き合うことになります。このため、がんを治療してどれだけ生きるかということだけではなく、自分らしくどう生きるかということにも関心が向けられるようになってきました。また、がんサバイバーが生活していくうえで直面する問題を乗り越えて生きていくことを「がんサバイバーシップ」といい、その支援が求められています。

基調講演は、NPO法人がんサポート鹿児島の代表である三好綾さんとがんサバイバーの写真撮影会やイベント開催などを通じてがん患者をサポートしているLAVENDER RINGの代表である月村寛之さんにWeb参加で行っていただきました。

第2部は3名のがんサバイバーに登壇していただき、三好さん月村さんも交えて座談会形式で行いました。がんサバイバーの苦労話や今頑張っていること、自分の体験を通じて医療者を目指す様になった話などに聴衆は真剣な面持ちで聞き入っていました。会場ではその内容に涙する市民の姿も見られました。がんサバイバーの抱える問題、がんサバイバーシップへの支援、そして「がんを生きる」ためにひとりひとりができることについて、活発な討論が行われました。

演者のインフルエンザ感染に伴うWeb参加への急遽変更などもありましたが、滞りなく無事に閉会することができました。がんサバイバーの生の声を拝聴し、久しぶりに味わう現地参加型のライブ感で来ていただいた市民の皆様にもご満足いただけたのではないかと思います。参加していただいた市民の皆様、演者の方々、登壇していただいたがんサバイバーの3名、裏方で頑張ってくれた職員の皆様に感謝申し上げます。

(文責：婦人科部長 神尾 真樹)



# 新任紹介



麻酔科

吉本 男也

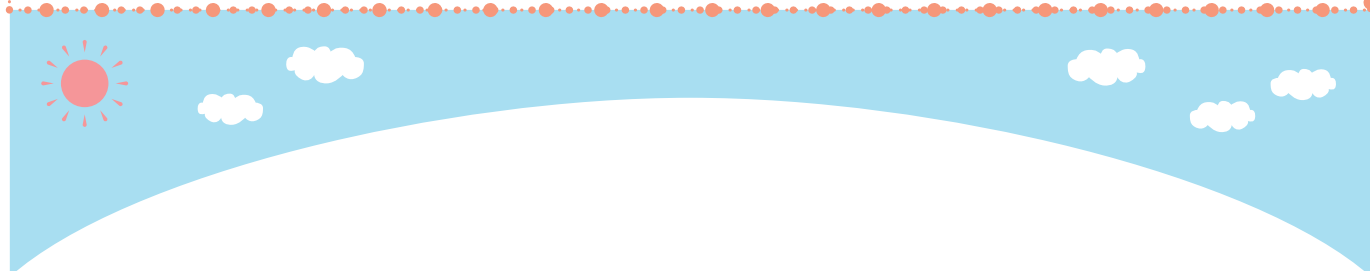
1月より鹿児島市立病院から当院麻酔科に赴任してきました、吉本と申します。こちらの病院は18年ぶり、麻酔科部長の米谷先生が赴任されたときと丁度入れ替わりでした。前医の勤務が12年半とかなり長かったこともあり、まず新しい職場環境に慣れるのと心臓麻酔の感覚を取り戻すのに苦労しそうです。医師になって20云々年目ではありますが、初期研修医の気持ちに帰ったつもり、とまでは言わないまでも、新たな気持ちで頑張っていこうと思います。余談ですが、私は昔から人の顔と名前を覚えるのが苦手です、出来るだけ皆さんに失礼がないようにと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



麻酔科

牧内 祐貴

2024年1月より当院麻酔科に赴任しました。初期研修医の2年間、そして2022年度もお世話になり、今回3度目の勤務となります。安全な麻酔を第一に、日々業務に取り組んでいく所存であります。まだまだ未熟で至らない点多々あると思いますが、よろしくお願いいたします。



■お問い合わせ先

独立行政法人  
国立病院機構

**鹿児島医療センター**（心臓病・脳卒中・がん専門施設）

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号

(代)TEL 099(223)1151 FAX 099(226)9246 <https://kagomc.hosp.go.jp/>

**メディカルサポートセンター**

地域連携室専用 FAX▶099(223)1177

※休日・時間外は当直者で対応します。

